



カントウータ

Cantuta

No. 49



ソタサ村のジャガイモ畑の耕運風景 撮影者 高橋慎一郎(学び舎づくりの会 所属時)

1. ボリビアの伝統技術を生かした土の建築 No. 4
—アンデスの農業と土蔵コルカー高橋 慎一郎
2. リベラルタの「慰霊塔」と
コビハ、トリニダの「慰霊碑」 佐藤 信壽
3. 日本人が見たリベラルタ —その11— 大島 正裕

一般社団法人日本ボリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

1. ボリビアの伝統技術 を生かした土の建築 No. 4

－アンデスの農業と土蔵コルカー
土の空間工房SoBaTo 代表
高橋 慎一郎

◆アンデスの農業に触れて

コチャバンバ (Cochabamba) 県に滞在中、そら豆と鶏肉などを使う爽やかな味わいのスープ料理「チャンカ・デ・ポーリョ」(Chanca de pollo) や、人参や鶏肉などを使うスッキリとした味わいの酢漬け料理「エスカベーチエ(Escabeche)」といった美味しい料理と出会い、豊かな食生活をしてきた。そこで、この号では、このような料理に使う野菜や穀物を産み出すアンデス(Andes)の農業体験談と共に、食糧の保管に欠かせないコルカ (qullqa) と呼ばれる土蔵 (どぞう) についても紹介しよう。

アンデスには、古来インカ帝国時代から、ボリビアとペルーの両国に跨るティティカカ(Titicaca)湖の水と大地を積極的に活用した「盛り土農法」と呼ばれる農業技術や、斜めに積まれた石垣が放射熱で畑の土を温める農法など、自然と調和した生産性の高い農法があったのは驚きだ。

こうした自然環境に配慮した伝統的な農業技術は、数千年に及ぶ試行錯誤や数多くの失敗を重ねた上で生まれ、先住民が厳しい環境の中で、長期的に生き残る術であったと言えるだろう。

また、コチャバンバ県も含めたアンデス地域は、トマト、ジャガイモ、トウガラシなどのナス科を中心とした日本でも馴染みある数多くの野菜や穀物の原産地でも

ある。特に、ジャガイモは数多くの伝統的な固定種があり、大きさは小さく、形も歪なものもあるが、どれも濃厚な味わいで美味しいと言われている。調査でコチャバンバ県アルケ (Arque) 郡やボリーバル

(Bolivar) 郡の山岳地帯を徘徊していると、幾度となく村人から唐辛子ソース「ヤファ (llajua:ケチュアquechua語のllaqwa(辛い)が語源)」を塗しながら食べる、茹でジャガイモをご馳走になりとても滋味深かった。

そして、生活をしていたコチャバンバ県でも、インカ帝国時代にはタワンティンスーユ (Tawantin Suyu) と呼ばれていた4地域のうち、コリャスーユ(Colla Suyu)地方に属し、様々な伝統的な農業技術が根づき、古来より穀倉地帯と呼ばれて、トウモロコシを中心とした様々な野菜や穀物が栽培されていた地域である。

この地域に住むケチュア族は、月を生かした太陰暦の農業を営み、日本古来の農業と通じる部分がある。こうした伝統的な農業が残る地域であるコチャバンバ県の西方に位置するアルケ郡コチ・バケリーヤ (Kochi Vaqueria) 村で一時生活をしていた。この村では季節に沿った農業を行い、雨が降らない日が続くと、大地の水が最も地面に吸い上げられる満月の夜、月明かりを頼りに、近隣の山の頂上へ村人数人で雨が降るよう祈りにいく。このような習俗が現代の生活の中で残っていることはとても神秘的であった。そして、この村の中心的な作物は、古来よりアンデスの優れた農耕文化を支え続けて、彼らの食生活に欠かせないジャガイモである。そのジャガイモ



写真2-1 ソタサ村で食したジャガイモ、チーズ、茹で卵を唐辛子ソース「ヤファ」と共に食した



写真2-2 コチ・バケリーヤ村の屈強な肉体を持ち、カラフルな民族服装を纏う農民たち



写真2-3 コチ・バケリーヤ村と同じアルケ郡でジャガイモ畑の耕作に活用される牛たち
畑の耕運は、牛に尖った木の棒を取り付けて、硬い粘土質の赤土を砕きながら、スペイン統治後に広まった平鍬（ひらぐわ）や、十字鍬（つるはし）を活用して行われていた。ペルー近郊のアイマラ（Aimara）族やケチュア族が、よく使う伝統農具の踏み鋤（す

き）を見ることはなかった。また、森林限界を超えているので、栽培できる野菜や穀物もジャガイモやスローフードとも言われるキノア（quinua）などに限られている。しかし、積極的な村人は温室を作り、村内では手に入らないトマトなどの栽培に挑戦していた。ここで興味深いのは、温室といっても日本の農村地帯でも近年よく見かける現代的な建築ともいえる鉄骨造の温室ではなく、この村の伝統的な建築構法で、タピアル（tapial）とスペイン語で呼ばれる版築壁（はんちくかべ）の温室であった。壁厚は約300mmで、壁の高さは約2m。屋根の材料は透明なビニールで、太陽光を通す素材で覆われていた。版築の土壁は太陽光を浴びた後、熱をよく蓄えて、室内に適度な熱環境を提供していた。トマトは強い日差しと少ない水で育つ野菜なので、温室に向いた野菜であった。



写真2-4 コチ・バケリーヤ村の版築壁の温室
話が少し外れるが、岡山県に葡萄の名産マスカットが栽培されている土壁の温室があると、写真を恩師に見せてもらった事がある。日本の気候の中でも、適切な熱環境と湿度を保つために土壁の温室は向いているようだ。

話を元に戻すと、コチ・バケリーヤ村で

は、様々な家畜や家禽を飼っていた。畑の堆肥になる牛糞を提供し、畑を耕すためにも必要な牛。手なづけるためにはコツが要るが、荷物の運搬に欠かせないロバ。牛と同様、糞が畑の肥料となるリヤマ。チーズづくりなどに欠かせない羊。普段の食生活に欠かせない卵を産む鶏。食肉として欠かせず、時にはコチャバンバの街で売って現金収入を得るための豚など。かけがえのない動物の力を借りながら、村人たちは楽しそうに自給自足の生活を送っていた。

次にコチャバンバ県で見た野菜や穀物の保存に必要な土蔵コルカを紹介しよう。

◆食糧保存のための土蔵コルカ

蔵は、自給自足の生活をするための食糧の保管には欠かせないだろう。西アフリカには泥を手で叩きしめながら積み上げた土蔵、スペインやポルトガルにはねずみ返しがついた石蔵、日本には1930年代に続いた飢餓を救うために東北各地に恩賜郷倉（おんしごうぐら）として建てられた木蔵など、世界中には地域の素材を巧みに生かした蔵がある。そして我が国、日本には土蔵もある。例えば、長野県海鼠（なまこ）壁が印象的な土蔵は野沢菜の保存のため、大分県津久見の赤土と石灰を混ぜた泥で石を積んだ蔵はみかんのため、福島県には竹を編んだ壁下地に粘土質の土を塗った土蔵は、こんにゃく粉を保存するためと、分厚い土壁で覆われた蔵の生命は、食糧の保存のためにあると言えるであろう。そしてボリビアにも、各地域の土を生かした蔵があったのだ。

まず初めにコチャバンバ市の郊外に位置したコタパチ（Cotapachi）村で見た土蔵を復元した遺跡を訪問した時のことを紹介したい。コチャバンバ市の中心市街地の9月14日広場で、ローカル新聞「ロス・ティエンポス（Los Tiempos）」を買い、週末の日曜日だけ、別刷りでコチャバンバの観光地などが特集されている10ページ程度の冊子が付いていて、面白そうな記事をスペイン語の辞書を片手に、毎週末、部屋で読んでいた。そしてある日、普段と同じくその冊子を開くと、目を見張る写真が飛び込んできた。民家の2階ほどある高さの日干し煉瓦の土蔵が、紙面いっぱいに映っていたのだ。そして、時間を見つけて、別の日にコチャバンバ市の中心市街地からタクシーを貸切りこの土蔵に向かった。タクシーの運転手さんも初めて行く場所で、現地の人に道を聞きながら、心をドキドキさせつつの調査であった。この土蔵はアルティプレーノ（Altiplano: アンデスの高原地帯）から降りてきた先住民が数多く見受けられるキリャコーリョ（Quillacollo）という街の西に位置するコタパチ村にある。広大な黄土の上に、その建物は姿を見せた。この土蔵は、インカ帝国時代に、トウモロコシの貯蔵に使われていた建物を復元したものであった。最近の調査によればインカ帝国時代には、61ヘクタールの土地に、南北軸に沿って、なんと5000もの蔵があったと言われている。膨大な数の、円形平面の柔らかみのあるフォルムの



写真2-5 コタパチ村に復元されたトウモロコシ用の
日干し煉瓦造の土蔵

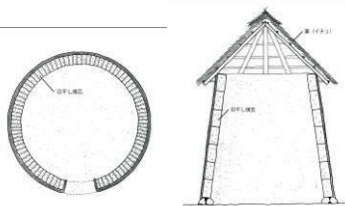


図2-1コタパチ村の日干し煉瓦壁の土蔵の平面図と立面図

土蔵が並ぶ風景を考えただけでも心がワクワクしたのは、今も忘れられない。

ペルーのハウハ (Jauja) には、直径6m×高さ4m、同じくインカ帝国時代のトウモロコシ貯蔵のための「石蔵」があるがこのコタパチ村の「土蔵」は、基礎には石を使っているが、壁は日干し煉瓦であったと言われている。調査を元に復元された3つの土蔵は、平面形態は直径3mの円形プランである。屋根の小屋組みは、角材を用いた木造で復元して、屋根仕上げは、イネ科のイチュ(chu)と呼ばれる茅葺きであった。壁仕上げは金網を日干し煉瓦壁に張り、その上に大地の黄土に細かく刻んだイチュを混ぜた泥を1回塗ってあった。このような蔵は、コチャバンバ県のタパカリ(Tapacari)、インカリャフタ、(Incallajta)、ポコナ(Pocona)、また隣県のオルーロ

(Oruro)でも見受けられたそうだ。

こうした伝統技術を生かした土蔵は、インカ帝国時代を知るための手掛かりとして重要だろう。また、観光資源としても活用でき、地域の活性化にも繋がり、市民の間で注目されているようだ。この蔵が現存したインカ帝国時代は、約1500万の人口を支えて、100万ヘクタールという土地の広さで70種類の野菜や穀物が栽培されていた。しかし、この時代には、農薬も化学肥料もなく自然農法の先駆けともいえる農業であったと言えるだろう。こうした大量の食糧生産があり、それを保存する蔵は重要な位置付けで、主に3つの目的があった。

- 1.凶作の年に住民を救済するため10年分の食糧が貯蓄されていた。
- 2.畑から採れたジャガイモやトウモロコシが備蓄されていた。
- 3.タワンティンスユーと呼ばれていたインカ帝国の四方へと進軍する兵士たちを賄うための食糧や武器などが保管されていた。

その中でも、今回は「2.」の目的の蔵に着目すると、ジャガイモとトウモロコシの蔵の平面形態に違いがあったのは興味深い。理由は定かではないがトウモロコシの貯蔵では円形平面、ジャガイモでは長方形平面であったと言われている。

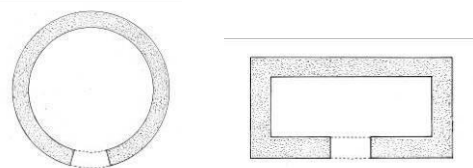


図2-2 トウモロコシ用(左図)とジャガイモ用(右図)の土蔵の平面形態の違い

次は、アルケ郡カニャビリ（Cañaviri）村のジャガイモ保存用に用いられた日干し煉瓦壁の蔵について紹介したい。この土蔵は、学び舎づくりの会による識字教育などのための施設の「学び舎」建設のための候補地調査で訪れた際に偶然目撃した。日干し煉瓦を積んで、外壁に荒々しく土と藁のイチュを混ぜた泥を塗った荒壁仕上げの土蔵であった。保存用なので、特に開口部もなく、全て塗り込めてあった。日干し煉瓦の建設現場でも、壁を斫（はつ）って電気工事の配管をしたりすることがあるので、この日干し煉瓦の土蔵も斫って、土蔵内部のジャガイモを取り出すことは現地の村人にとっては、大して苦にはならないのであろう。



写真2-6 カニャビリ村のジャガイモ用の土蔵



写真2-7 カニャビリ村の日干し煉瓦づくり
最後に、コチャバンバ県の南西に位置するカピノート（Capitana）郡シカヤSicaya市ソタサ（Sotasa）村の土と石を用いて作られた蔵について紹介したい。この村は、



写真2-8 カニャビリ村の版築壁に囲まれた村内

アルケ川から黄土色の山肌が露出した山道を2時間、テクテクと歩くと到着する。標高2,800mに位置して、55家族が長閑な丘に分散して広がる村である。この村ではジャガイモ、そら豆、トウモロコシ、大豆などを栽培している。村を歩いているとそうした野菜を保管する土と石で建てられた蔵があった。円形平面で直径2mの大きさの蔵をつぶさに観察すると、基礎はなく土を目地材に石を積み上げて壁を作っていた。屋根は木造で登り梁にして、頂点で束ねており、母屋（もや）材は木の枝を曲げて作っていた。その上に、丘で採取可能なイチュを葺いた茅葺き屋根であった。近隣には、同じような蔵は見掛けられず、住民自ら、デザインした蔵であったのだろう。周辺に生えている草のイチュで葺いた茅葺き屋根の風景は美しく、歓喜した。今回、紹介した3つの蔵以外にも、土の地温安定性を生かして、1日の中で室温の変化が少なくなり、貯蔵品が腐ることなく、味や香りが保たれる蔵の原型といえる地下の「室（むろ）」もあった。固い粘土質の地面を掘り、「むろ」の中でメイクインに似た主食のジャガイモを大事に保管す

る村人を、アルケ郡ミカヤニ・チコ
(Miyacanichico) 村で見た。



写真2-9 ソタサ村の野菜用の土と石の蔵

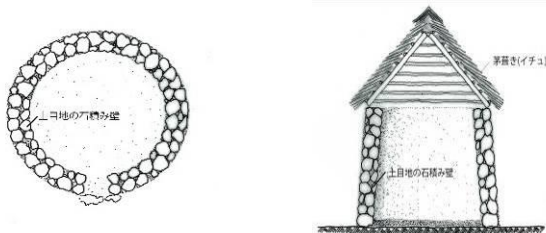


図2-3 ソタサ村の野菜用の土と石の蔵の平面図と断面図



写真2-10 ソタサ村の家畜の羊用の小屋

◆農民カンペシーノから学ぶ

筆者は現在、東京の南多摩地方の日野市で、平日はサラリーマン農家をしながら、休日は自分の庭を含めて約100㎡の3つの小さな畑で、固定種や伝統野菜を中心に年間50種類程度の野菜や果物を育てている。時折、生ごみコンポスト用に日干し煉瓦を作り農的生活をしている。

こうした生活をするのは、やはり、この

号で先に紹介した農村のコチ・バケリーヤ村での、生き生きとした表情のケチュア族の人たちとの生活経験や、調査で訪れた様々な農村で目撃した土蔵を含め、アンデスの農業を見てきた経験が大きいと思う。



写真2-11 アルケ群のミカヤニ・チコ村の「むろ」
アンデスの農業も、ジャガイモの固定種の継承、機械化されない農業、近年の気候の影響で雨が降らないなど、様々な課題を抱えている。しかし、農民である彼ら・彼女らなりに、月に雨乞いをしたり、時折、工夫をしながら自然や大地とつながる自給自足の暮らしぶりに学ぶことは多かった。

今、農民の端くれとして、時折、日干し煉瓦を作りながら、ボリビアの農民カンペシーノ (campesino) と同じく畑の大地の上を歩いている。そして、衣食住を支える大事な土を自ら耕す行為の中に、今の世の中に希望の光を齎し (もたらし)、生きる力を与えてくれるものがあるのではないかとの思いを日々抱きながら、農作業に従事している。皆さんも農作業始めてみませんか。(つづく)

以上は、雑誌『月刊さかん』などに寄稿した記事を改稿した文章、新しく書き下ろした文章やボリビアでの仕事や旅で見聞したエッセイなどをまとめた自費出版『チャスキ ～ボリビア 土の建築奔走記～』2021より内容を抜粋・改編したものです。

2. リベラルタの「慰霊塔」とコビハ、トリニダの「慰霊碑」

前ボリビア日系協会連合会事務局長
佐藤信壽

ベニ県のリベラルタ市、トリニダ市及びパンド県のコビハ市の中央墓地には、日本語で「慰霊碑」「慰霊塔」と書かれた銘板の付いた碑がある。その碑の別面には、「“EN MEMORIA” AQUÍ YACEN LOS RESTOS DE LOS PRIMEROS IMMIGRANTES DEL JAPON QUE LLEGARON A BOLIVIA DESDE 1908 MARZO DE 1964

EMBAJADA DEL JAPON (「追憶」1908年以降にボリビアに到着した日本人移民の遺骸ここに眠る。1964年3月、日本国大使館)」と記された銘板が付いている。

リベラルタ市のものは、「慰霊塔」で。コビハ市とトリニダ市のものは「慰霊碑」である。



写真2-1 リベラルタの慰霊塔
(2021年10月撮影)

「奥アマゾン」と言われる地の離れ

た都市に、心（うら）寂しく立つ「慰霊碑」は、20世紀前半にこれらの地で活動し、亡くなられた日本人の『兵どもの夢の跡』に思いを馳せる端緒となるものであろう。



写真2-2 コビハ市の慰霊碑 (2021年10月撮影)



写真2-3 トリニダ市の慰霊碑の表と裏の銘板

1990年代半ば、私は、1999年の「日本人ボリビア移住百周年祭典」の調整でラパス市に旅行した。その折に、当時「ラパス日本人会」の顧問をされていた故井門泰氏から1964年にこれらの「碑」が建立された経緯について聞いたことがあるので、それを書きおきたいと思う。

「当時の大使は、川崎栄治氏でした。川崎大使は、1961年3月に臨時代理公使として赴任され、その年の10月に公使館が大使館に昇格されたのに伴い臨時代理大使に昇格され、その後初代の大使に就任されました。

川崎大使は、魚釣りが大変お好きな方でした。リベラルタは、ベニ川とマドレ・デ・ディオス川の合流点なので大きな魚が釣れるので、時間を見つけては、リベラルタに釣りに行かれてました。

リベラルタでは、近野さんのお宅に宿泊されましたが、近野さんは釣りをされないので、釣りの案内は渡辺さんがされていました。

1962年から1963年にかけての雨期にリベラルタの墓地の一部が流されたのをご覧になられて、その流された川に近い部分には、日本人移住者の墓が多くあったので、心を痛められたようでした。

当時ラパス日本人会では、墓地の中に散在している日本人無縁仏の墓なども一か所に纏めて日本人会の納骨堂を作る計画をしているところでしたので、ラパス日本人会の長老方と相談されて、20世紀初頭のゴム景気の時にボリビアに入国した日本人が多く在留していた、コビハ市、リベラルタ市、トリニダ市に慰霊碑を建立して、無縁仏となっている方々の遺骨を纏める案ができました。それらの地域の日本人会と相談したところ、皆喜んで「是非お願いしま

す。」ということだったので、「慰霊碑」の図案を作成し、3地区の日本人会に予算を作成してもらうこととなりました。私(井門)は、大使に随行して、「慰霊碑」を建てる場所と予算を確認しに、トリニダ、リベラルタ、コビハと回りました。

リベラルタでは、『墓地の中央』といっても川が近いので、図案のようなものを作っても、数年後には傾いてしまう懸念があるので、高さは低くして、幅のあるものを作ったほうがいい。」ということで、別の図案で作ることになりました。

最後にコビハを回って、ラパスに戻る時に、航空機の中で予算を検討していたら、大使館の予算では、3か所を作ることができないので、どこを削るかと相談していました。

丁度同じ便にパンド県の知事となっていた日系二世のエルネスト・ニシカワ氏(写真2-4参照)が搭乗していて、大使に挨拶に来たので、この件を話しました。

エルネストは私たちのお父さんたちの慰霊碑になるのですから、是非、日本大使館の名前で3地区に作ってください、予算が足りないのであれば、コビハの分は私が出しますから是非お願いします、と熱心に申し出てくれました。

それで、川崎大使は「ニシカワ知事、ありがとう。3地区に日本大使館として作るので、予算の不足するところは、

コビハに負担をかけますが、お願いします。」と申し出を受け入れました。

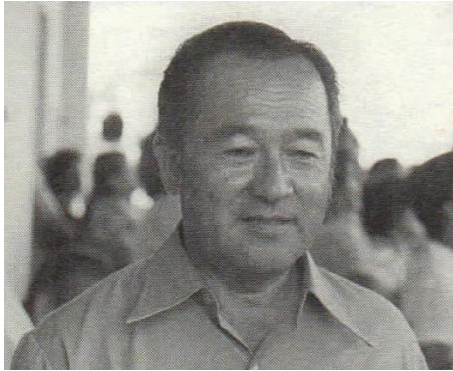


写真 2-4 エルネスト・ニシカワ
1920 年生まれ パンド州出身日系人の有力者。
ラパス・UMSA 大学卒、
1959 年コビハ市長、
1961 年パンド県知事、
1964 年下院議員、その後上院議員となり
1980 年逝去

私（井門）は、リベラルタで『碑』の土台を作る時に、その下に埋葬する日本人の遺骨を集めるのを監督しましたが、日本人の墓と言われている所を掘ると、場所によっては、3 体分とか 4 体分の遺骨が出てきたところがあり、その中のどれが日本人のものなのか、全部が日本人のものなのかが分からず悩みながらその地区の日本人と相談して処理しました。

いよいよ『碑』が完成することになりましたが、その『碑』にとりつける銘板を作る時に、川崎大使は、大使館の中で『書』が上手なのは、吉水さんだから吉水さんに揮毫をお願いしよう、ただ、この元となったリベラルタについては、私が揮毫することにしよう、と言われました。

ですから、コビハ市とトリニダ市の『慰霊碑』は川崎大使の 6 代後（1981 年から 1983 年）の大使となられた、当

時の吉水通二等書記官が揮毫され、リベラルタ市の『慰霊塔』は、川崎大使が揮毫されました。」

上述のように故井門さんから聞いた話も、何時とはなしに忘れていたが、昨年（2021 年）ボリビア日系協会連合会から「ウェブサイトを作成するので、ベニ県とパンド県の移住者のデータを纏めてくれませんか。」と依頼され、各地を訪問し、各墓地の『碑』を写真に写した折に思い出した。

2020 年の新型コロナウイルスの影響で、各地の日系人の活動が止まっているが、現在のボリビア日系社会の礎を築いた日本人の遺骨が埋葬された「慰霊碑」と「慰霊塔」があることは、後代までも忘れないでもらいたいと思う。

因みに「慰霊碑」の下に眠る方々はどのようにしてこれらの地に来たのであろうか。彼等は、1899 年に始まったペルー移民として、ペルーに入った。その後、1905 年にアメリカ資本の「インカゴム会社」と「明治殖民会社」の間で取り交わされた「ゴム採取労働者派遣契約」によって 1907 年からペルー・アマゾン圏のタムボパタのゴム林に就労のため派遣された移民である。そして、ペルーのゴム林での就労よりも、賃金が高いと言われたボリビアのリベラルタへ転住して来たのである。

彼らは、ペルーの太平洋岸のモリエンド港からアンデス高原のティラパタまでを車で移動し、ティラパタからタムボパタまで徒歩で進み、タムボパタ川の急

流をマルドナド港まで下り、マルドナド港から写真 2-5 のような丸木舟でマドレ・デ・ディオス川を下り、リベラルタに着いた。彼らの多くは、リベラルタ周辺のゴム林で就労した後、ゴム景気の凋落により他の都市へと移った人々である。リベラルタからコビハへは、オルトン川・タウアマヌ川を遡行してポルベニールから徒歩で移動している。リベラルタからトリニダへは、ベニ川を下航し、マモレ川との合流点からマモレ川を遡行しての移動である。



写真 2-5 堀内良平「聖母河畔の 16 年」大正 15 年より

彼らの移動したところは、アンデス高原では標高 5,000 メートル近い峠もあった（そこを高山病に悩まされながら越えた）。また、アマゾン流域の川には、ワニやピラニア、アナコンダなどが棲息している。森林には、ティグレ（トラ）や毒蛇が棲息している。また、当時は、まだ野蛮なグループといわれていた先住民部族もいた。彼らは、日本人としての海外飛躍を夢見た『冒険者』とも、『先駆者』ともいえる人たちであり、今静かにボリビアの地に眠っている。

（おわり）



写真 2-6 椿秀洋大使（当時）が 2015 年 6 月 1 日リベラルタ墓参の際に日系人と共に撮ったもの



写真 2-7 椿秀洋大使（当時）が 2015 年 11 月 19 日トリニダ墓参の際に日系人と共に撮ったもの

3. 日本人が見たりベラルタ

—その 11—

財団職員

明治大学島嶼文化研究所客員研究員

大島正裕

1. 青野菜の普及

日本人がリベラルタに辿り着いたのは 1908 年と云われている。そこから日本人数は増え始め、1914 年に 300 人、1917 年に 420 人、1918 年に 700 人と第一次世界大戦期間に黄金期を迎えた¹。この間に 1914 年の沖縄県人会を嚆矢に、リベラルタ日本人会や多くの県人会が創設され、在住日本人は町

の中で存在感を増していった。しかし、戦後は、アマゾン地域のゴム産業の退潮と共に、ゴム集積地としてのリベラルタも不景気に陥り、帰国者や他地域・他国に転住するものも増え始め、日本人数は減少に転じた。1923年には262人と全盛期の約3分の1程度まで減少し、前号で紹介した外交官野田良治がリベラルタを訪問した1930年時点では、169名（男子163名、女子6名）となっていた²。

他方で、人数が減少しても、日本人がリベラルタ社会へ貢献した実績、殊に農産物の生産については敬意が払われていたようだ。野田に依れば、「リベラルタ町を中心とせるベニ地方の勃興は、全然野生ゴム採集業のみに依るもので、商業は其の採集したるゴムを輸出すると同時に、ゴム林に向つて供給すべき食料品、被服類、器具類および其の他の必要品を輸入するため、必然的に迅速に起こつた」³。当初は食料品や日用品を外部に依存したが故に、物品は法外な価格で取引されていたが、日本人がリベラルタ周辺部に展開し農業を始めたことで、食料品の供給量が増えて価格が下がった。また、早々に農業に参入した一部の日本人は、野菜や果物、米やその他穀物の生産者が少なく競争がないため、相対的に高額で販売することもでき、かなりの利益を得ることができた。その後、その他の日本人や地方民も農業に参入したことで、価格競争が起こり相対的にうまみは減ったが、貯金して日本へ凱旋したものもいた⁴。野田は、リベラルタ訪問時に近隣の日本人経営の農場（チャコ（chaco））を視察し

、熊本県人竹尾忠二の農園では、バナナ、パパイヤ、タマネギその他野菜が栽培されていることを報告している⁵。

野田の訪問から約50年後の1980年代初頭には、既に一世が少なくなり、二世以降が中心となっていたリベラルタにおける調査で、国本伊代氏（当時中央大学教授）は、日本人的要素がほとんど見当たらない日系社会内で日系2世、3世が「青野菜の普及を日本人の活動と同一視している」と述べており⁶、日本人が野菜生産を通じて地域にしっかりと根を下ろした足跡を認めている⁷。

しかし、どの社会もそうであるが、外来の集団が、ローカル社会にうまく溶け込むためには、その集団と受け手社会との双方の間で互いに調和を求める努力が必要である。当初は、日本人はかなり警戒されていたし、1930年代から40年代にかけては、母国日本が第2次世界大戦で「同盟国」の主体となったことにより、米国側（「連合国」側）に立つボリビア社会内で再度苦難の歴史を辿ることになる。本稿では、リベラルタに住んだ日本人がどのように地元溶け込むために苦闘したのか、地元社会の反応も検討しつつ、残された資料の断片から読み取ってみよう。

2. 警戒から招聘論へ

日本人がリベラルタに移住した頃の地元紙の報道で、当時の日本人がどう見られていたのかを示す資料がある。1914年11月1日の記事には、「日本人移民の存在は地域にとって不都合である。その理由は、

必要な時だけ定住して、金を貯め、母国へ戻るから」と記されている⁸。外国に根付かない存在として、日本人は受止められていたことが分かる。



写真3-1 数々のインフラ整備を行い、近代化を推進したサアベドゥラ大統領⁹

1920年代初頭には、サアベドゥラ (Bautista Saavedra) 政権が、欧米からの移民を奨励すべく各種法律を策定する等しているが、この波に乗って日本やアジアからの移民も増えていった。この頃は、米国でも自国における日本人移民への警戒が強まった時期に当たっていて、在ボリビア米国領事館は、ベニ県首府のトリニダとその周辺に日本人が集まっていることを報告している¹⁰。当時ラテンアメリカで流行った人種主義では日本を含むアジアからの移民は社会的統合を阻害する要因として、好ましいとは考えられておらず、日本人移民にとって風当たりが強い時代が続いていた。

ところが1930年の野田良治の報告では、このような状況を乗り越えて、ボリビアに

一定の日本人ファンが生まれていたことが窺える。例えば、野田は、彼がリベラルタを訪問したときの「在留同胞の催せる宴会」の様子を記録している。野田の歓迎も兼ねて、同地の日本人協会はリベラルタの「主なるボリビア人」を招待して宴会を開いたが、招待客には「土地の最高官憲である郡長を始めとし、町長〔中略〕の代理、裁判所長、駐屯軍司令官、視学官、町の衛生医、弁護士、代議士候補者、ボリビア中央銀行支店長、大商会の主人又は支配人、日本人を愛顧保護せる有力者即ち在留同胞の恩人に至るまで其の数二十余名を数え」¹¹とあるように、この頃、日本人社会が地元の有力者と強いコネクションを持っていたことが分かる。弁護士や裁判長等との結びつきは、地元とのトラブルを解決・回避するために有用であったろうし、金融関係者や医師等は商売や日常生活を送る際に不可欠な人脈である。日本人は日本人会等を通じて、地元社会との結びつきを強化し、その結果が宴会の出席者にも反映されているといえる。

更に、野田は面白いエピソードを書留めている。前回も紹介したスアレス商会の拠点カチュエラ・エスペランサ (Cachuela Esperanza) から、リベラルタ行きの定期汽船トリンフォ号 (Triunfo、勝利・凱旋の意味) に乗船した野田は、航路の途中、ベニ川の支流オルトン川 (Río Orthon) の河口近くのバラコン・オルトン (Barracón Orthon) で乗船してきたオスワルド・バカダイエス (Oswaldo Vaca Díez) と知り合いになる。同人は、リベラルタが帰属するバ

カディエス (Vaca Díez) 郡を切り開くの
に貢献し、その名前の元になったアントニ
オ・バカディエス (Antonio Vaca Díez)
の子息で、同地方のゴム農園、農牧場経営
の有力者であり、日本人も多数雇用してい
ることから、日本人に対して独自の哲学を
持っていた。さらに汽船トリンフォ号のオ
ーナーでもあった。野田はリベラルタに到
着するまでの間、この「年の頃50近く
の」紳士と仲良くなり話し込む。ところが
困ったことにオスワルドは耳が悪く筆談
となってしまった。筆談した紙は、オスワ
ルドが（日本の外交官とのやりとりの影響
を恐れたのか）証拠が残らないようにその
場で破棄したようだが、そこはさすがに外
交官の野田、オスワルドの日本移民論を整
理し著書内に纏めている。

野田によると、バカディエスは、リベラ
ルタ商工会議所所長だった頃の1927年9月
9日に次のような報告書を書いたという。

ボリビア西北部の野生ゴム採集業は、東
南アジアのプランテーションの前に劣勢
を強いられていることに鑑み、この地域で
もゴムの合理的栽培を行い、この合理的栽
培に日本人移民を積極的に用いるべきで
ある。日本人移民がいかに有益かは1914年
以来この地に住む日本人労働者がこの地
方のためにどれくらい有益なことをした
のか、皆の記憶するところである¹²。

自然に任せる冒険主義的なゴム採取か
ら転換し、計画的且つ合理的なゴム・プラ
ンテーションを計画し、そこに日本人労働
者を招聘するというプランであるが、1910
年代の厳しい時代を超えて、確実に日本人

が現地との結びつきを強化してきたこと
が、こうした地元有力者の日本人への評価
になって表れたともいえる。



写真3-2 マドレ・デ・ディオス川付近の地図（「オル
トン河」と見える）¹³

写真3-3 オルトン川¹⁴

3. 天長節その他

それでは、日本人は、どのように地元社
会との関係を構築したのだろうか。

ひとつは、大規模なレセプション（祝宴
宴会）であったろう。野田が来訪した機会
を捉えて開かれたレセプションは、町の有
力者を招待して人脈を構築・強化するのに
極めて有益だったが、そうした機会は頻繁
にあるものではない。一番良いのは、定期
的な町のイベントに参加することだ。例え
ば、8月6日のボリビア共和国（当時は「共
和国」）の独立記念日は、町民としてイベ
ントに参加するのに絶好の機会であった。

1921（大正10）年に日本人会は、同日にあわせて子供たちの学校で賞品付きの運動会を企画している。その中身が、男子はサルテン〔フライパン〕競技、二人三脚、旗採競争、鉢巻取 源平、眼かくし競争、武装競争、徒歩競争、女子はベラ〔蠟燭〕競争、クチャロン〔お匙〕競争、戴袋競争、赤十字競争と何とも日本的なのが面白い。

また、日本人会主催行事も地元民との友好関係を築くために積極的に活用された。中でも重要であったのが、この時代も今も毎年開催され、且つ大規模に実施される

「日本的」イベントで年に1度の「天長節」（天皇誕生日）であった。大正年間は大正天皇の誕生日8月31日が天長節となるべきだったが、様々な事情から各種式典は誕生日の2か月後の10月31日に設定された¹⁵。このため、リベラルタ日本人会も10月31日を毎年の天長節行事のために設定していた。

例えば、1922（大正11）年10月25日の議事録の記事では、活動写真（＝映画）の他に福引にするか相撲にするか等議論が出て、結果、相撲に決した。議事録内からは明確ではないが、相撲の方が地元民に訴えるインパクトが強かったのかもしれない。

1923年は、関東大震災を受けて天長節の開催を取りやめたが、翌年24年には再度挙行し、10月21日の評議員会では当日のプログラム等も決定し、その中には活動写真と並んで、「フットボールの試合を致しむること」とあり、サッカーの試合が含まれている。地元を強く意識していることが窺え

る¹⁶。

こうしたかつての天長節については、戦後にリベラルタ在住日本人も記憶していた。1968年8月12日にリベラルタで実施された座談会で、同地在住の大坪幸蔵は、

「そのころは天長節、私らがよく記憶しておるのは、9時に式をやるんですよ。

そして官憲の人をみんな呼んで、そうするとそのあとに二世の子ども呼んでから運動会をやりおったですよ。それがすむと2時ごろから相撲をとったですよ。相撲をとって、それが5時半ころまでやっておるんですよ。それがすんでしまえば、夜は活動を只〔ただ〕でやったんですよ。しかし官憲のみんな、その人らは席をずっと別にとって、きてもらうようにして、全部ほかのところは只で入るようにして、大勢の人間が入ったものですよ。」（強調下線は筆者）¹⁷

このように、天長節等を通じて、地元との結びつきを強化したことが、この地の日本人社会の存続を保证することになった。

（つづく）

¹ 向一陽『アンデスを越えた日本人 聖母の川を下る』（中公新書、1980年）、192頁

² 野田良治『南米の核心に奮闘せる同胞を訪ねて』、博文館、1931年（『日本移民資料集 南米編 第20巻（昭和戦前期編）、日本図書センター、1999年所収』）、319頁。

³ 野田、350頁

⁴ 野田、350 - 351頁

⁵ 面白いところでは、上木原伝右衛門という人物は甘蔗を栽培し、焼酎製造業を営んでいた。野田、344 - 346頁。

⁶ 国本伊代「リベラルタの日系社会 ポリヴィア日系人調査の旅から」（『海外移住』第429号）、1984年、4頁。

⁷ 日本人は、他の地域からマンゴやバナナ等も導入する等、かなりの工夫を凝らしたことも報告されている。（渕上英二『日系人証明 南米移

民、日本への出稼ぎの構図』、新評論、1995 年、160 頁)。

⁸ *La Unión*, Riberalta, 1 de noviembre, 1914

⁹ Carlos D. Mesa Gisbert, *Presidente de Bolivia: entre urnas y fusiles*, Artes Gráficas Sagitario S.R.L, La Paz, 2006, pp.656-657.

¹⁰ Antonio Mitra, *Náufragos en tierra firme, Bloqueo comercial, despojo y confinamiento de japoneses de Bolivia durante la segunda guerra mundial*, Editorial EL PAIS, Santa Cruz, 2006, p.23-24.

¹¹ 野田、338 頁。日本人会は、1924 年に発生した日本人社会内の殺人事件をめぐって一時的に分裂し、一方は 25 年にリベラルタ中央日本人会が創設された。この中央日本人会でも天長節の祝賀会行事は受け継がれており、1926 (大正 15) 年には、町の有力者に加え、フランス、ペルー、スペイン等の各国の領事も招待されていたことが分かる (大塚真琴「新垣庸英とボリヴィア逃亡移民」『移住研究』第 29 号、1992 年、125 頁)。なお、日本人会の分裂は 1928 年に解消された。

¹² 野田、306 頁

¹³ 淵上英二、130 頁。

¹⁴ *Atlas Socioambiental de las Tierras Bajas y Yungas de Bolivia*, Editorial FAN, 2015

¹⁵ 『大正天皇実録 補訂版 第四』には、大正 2 年から「8 月 31 日にありては天長節祭のみを行なはせられ、特に 10 月 31 日を天長節祝日と定め、宮中に於ける拝賀・宴会は同日に行はせられるべき仰あり」とあり、各種行事は 10 月 31 日に比重が置かれた。(同書、163 頁)。

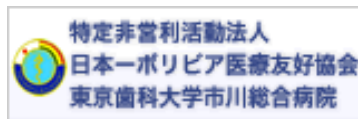
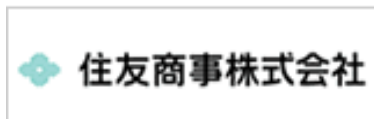
¹⁶ 以上は、リベラルタ日本人会の議事録より。なお、議事録については、ボリビア在住の佐藤信壽氏の転写版も大いに参考にさせていただいた。厚く御礼申し上げます。

¹⁷ 『日本人ボリヴィア移住史』、187 頁

編集委員

椿 秀洋 杉浦 篤 細萱 恵子

◎日本ボリビア協会維持会員一覧◎



Copyright© 2002-2022

一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)